

1 高原地区の概要

(1) 概要

高原地区は、邑南町の中央東寄りに位置する面積 4,539ha の地区である。21 の集落（362 世帯 872 人、高齢化率 45.9%）、2 つの自治会があり、「星が丘」と呼ばれる地域には、保育園、小学校、邑南町社会福祉協議会本部、公民館が隣接する。

長年活発に活動している高原神楽団や地芝居団体「星が丘一座」は、地区内外でイベント出演を行っている。

高原地区は山間部にありながら、かつて海だったことから、主に貝化石が発掘されることを活用し地区内外から参加者を募る化石発掘体験の取り組みが行われており、町内小中学校の学習の場としても活用されている。また 2 年前には「ブッポウソウを愛する会」が結成され、渡り鳥のブッポウソウ保護活動を基本に豊かに残る自然環境の保全への取り組みを始めている。

高原出身の小林徳一郎は、事業に成功した後、郷土への多額の寄付や、出雲大社の大鳥居を寄進したことで知られている。

2 事業の趣旨

多くの地域住民が学び卒業した地元の小学校。児童数は減っても、昔と同じように元気に学んでいる子どもたちの姿を見て、もっと子どもたちと接したい、伝えたいと思っている人も多い。きっかけを作り、子どもと地域の大人が知り合いになり、子育て中であるに問わず積極的に子どもたちの成長に関わろうとする大人の意識を高め、安心感のただよう地域の雰囲気を作っていく。

3 具体的な取組内容

① 「みんなの学校」映画上映会

一昨年から邑南町内でも上映されている映画。高原公民館で上映し、広く地域の方に観てもらおう。映画終了後、小学校の現状を説明し、地域の子どもたちへかかわろうとする気持ちを持ってもらうよう訴え、地域の方へ小学校周辺環境整備への参加を募る。地域の子どもたちとかかわりを持つきっかけとなるため、アンケートで「どんなことを子どもへ伝えたいか。」「何を子どもたちと一緒にやってみたいか。」などの問いを設定して、具体的に次の動きへつながる情報を得る。

② 星が丘ふれあいコンサート

地元の中学校、高校、公民館コーラス教室などの皆さんによるコンサート。小学校を卒業した先輩方が演奏する音楽に触れる機会をもち、子どもたちには地元の中学校、高校、公民館活動を身近なものに感じてもらう。

③ 竹細工・そば打ち体験、しめ縄作り体験など各種体験活動

さまざまな体験活動を行うが、協力者は高齢化、固定化している。子どもに伝えるだけでなく、協力者の育成も必要であり、子どもとのかかわりに興味のある方は素人からでも積極的に体験活動のスタッフとして参画してもらい、大人の体験活動としても開催する。知識や技術の世代分断を解消するため、子どもだけが体験するのではなく、その保護者へも同じように体験活動に参加を呼び掛け、指導者となるよう働きかける。

4 評価と成果

① 「みんなの学校」映画上映会

映画上映後、小学校周辺環境整備作業への参加を呼びかけ、作業当日には、保護者以外の地域の方の参加があった。地域と学校の良好な関係を築き、保護者が地域活動へかかわっていくきっかけにもつなげることができた。またアンケート結果から、具体的に子どもたちとかかわろうとする提案を受け、地域の方と小学校、保育園へのつなぎ役として公民館が動き、提案していただいたことを実行に移すことができた。



映画上映後、地域行事でも使う校庭「星が丘グラウンド」の整備を呼びかける

② 星が丘ふれあいコンサート

子どもたちは、先輩が活躍する様子を生で見ることで、中学校、高校への憧れを持ち、大人たちは、地域と疎遠になりがちな中高生が部活に打ち込んでいる姿を見ることで、応援したくなる。この取り組みを通じて子育てが終わった大人が、今、高原で成長している子どもたちに目を向けるきっかけになった。



中高生、地元音楽グループ合同演奏

③ 竹細工・そば打ち体験、しめ縄作り体験

親子限定や、学校行事としてではなくだれでも参加できるように参加対象を拡大した結果、「竹トンボを作るのが得意だ。」「しめ縄作りを習いたい。」と新たな指導者、指導者予備軍の人材を発掘することができた。参加した保護者も子どもたちと一緒に作品を作ることで、今後指導者として関わりを続けてもらう可能性を広げることができた。



参加した保護者も、子どもたちと同じように作品作り

5 今後の課題と見通し

今年度の取り組みで、子育てが終わった地域の方の新たな子育てへの関わりを作ることができた。これが一時的なものではなく、持続する地域の当り前の姿として定着するよう、関係各機関へ協力を呼びかけ続ける必要がある。

一方、子育て中の親世代も、子どもたちと一緒に、地域の先輩から様々なことを学び体験し、子どもたちのために一生懸命に子育てをしている姿を地域の人が見る場面を増やし、その姿勢を地域の方が見ることで新たに子育てに関わろうとする人が増え、好循環が生まれるよう工夫していきたい。

(文責：主事 佐藤匡裕)